

## 『宗義決択集』に見る弘法大師の思想の展開

—「五常引業」を題材として—

高柳健太郎

## はじめに

執筆者は、現在、密教文化研究所・南山教学研究会主催の輪読会において、『宗義決択集』を読み進めている。周知の通り、『宗義決択集』は高野山の宝門の学統を伝える論義書である。それを読み解くことで、真言宗の教理・教学を学ぶとともに、密教の展開において「論義」の果たした役割についても、考察をしたいと考えている。

そんな研究の成果の一端を本年度(平成二十九年度)の密教研究会において発表したのが、その際にとりあげたのは「無尽莊嚴藏」という論則であった。それは「法身・大日如来は、説法をする時に装飾品を身につけるのか?」を問う内容であるが、その内容よりも、「問答が途中で終わっている」という形式において、特徴のある論義であった。そして、その論義に関して「なぜ問答が途中で終わってしまったのか?」を考察することが、「論義」のあり方を考える上で重要な手がかりとなると感じた(発表の詳しい内容については、いずれ論文として公開する予定である)。

さて、『宗義決択集』には他にも「問答が途中で終わっている」論義が収録されている。本稿でとりあげる「五常引業」もその一つである。本稿では、まず論義の内容を概観し、その上で「なぜ問答が途中で終わってしまったのか?」を検討する。そして、そこから見出せる「論義」のあり方を提示し、さいごに、「論義」が密教思想の展開において果たした役割を考察したい。

## 1 「五常引業」の概要

今回とりあげる論則「五常引業」の主題は、儒教の説く徳目である「五常(仁・義・礼・智・信)」の実行が、来世において人趣に生まれる因となるか、という問題である。これは、大きく言えば(仏教と外教の関係)の問題、もう少し細かく言えば(仏

教以外の教えの遵奉によつて仏教的な果報が得られるか」という問題と言える。この議論において、難方は「五常の実行は人趣への引業にはならない」と主張し、答方は「……引業になる」と主張する。

議論の展開は以下の通り。まず難方の主張——「五常」を説く儒教は外教であり、そこでは三世の因果は論じられない。したがって、その教えは来世には関わらない。

凡そ五常の教えは、是れ孔宣 震旦に出でて述ぶる所の外教にして、彼の儒教には未だ三世因果の理を談ぜず。争いでか未来人中の引業と成すと云う可しや。

そして、この主張の根拠として『秘蔵宝鑰』「第二愚童持齋心」の記述を引用する。

五常と言うは仁義礼智信なり。仁をば不殺等に名づく、己おもんばかを恕おもんばかつて物に施す。義は則ち不盜等なり、積んで能く施す。礼は曰く不邪等なり、五礼 序ついで有り。智は是れ不乱等なり、審つまひらかに決して能く理ことわる。信は不妄の称なり、言つて必ず行ず。能く此の五を行ずるときは、則ち四序 玉燭し、五才 金鏡なり。……外には五常と号し、内には五戒と名づく。名異にして義融じ、行同じうして益別なり。〔定弘全〕卷三、一二〇頁。引用は傍線部のみ)

難方の見解に従えば、この記述は次のような意味であるという。

五常・五戒の行相同なりと雖も、五常は但し現世の美名を飛ばし、五戒は則ち、近くは人天に趣き、遠くは仏果に趣く功有り。故に「行同益別」と釈す。

難方の主張をまとめれば、「五常はあくまで外教の説であり、実践の内容は同じでも、それによつて得られるものは異なる」というものである。こうした主張に対して、答方は「実践の内容が同じであれば、当然それによつて得られるものも同じはずだ」と反論する。

五常・五戒の行体同なる義、高祖「行同」の解釈分明なり。行因 既に同じ、感果 何ぞ別ならんや。然るに彼の五戒は人中の引業なる義は已に一定す、彼と行同なる五常、何ぞ引業と成らざらんや。

ここでは、さきに難方が引いた『秘蔵宝鑰』の記述に見える「行同」という言葉に焦点を当てて反論がなされている。とはい

え、このように反論する場合、当然、同じ記述の中に見える「益別」の言葉が問題となる。それについて、答方は次のような解釈を示す。

但し大師「益別」と釈する文……は、且く内外の不同を頭わさんが為にして、再論の実義には非ざる者か。

すなわち、「益別」というのは内教（＝仏教）と外教を区別するための仮の論述である、と。なお、「五常は外教の説であり、そこでは三世の因果は論じられない」という主張に対しては、つぎのように反論する——儒教は確かに三世の因果を論じないが、行為に対して果報があるのは当然の理である。

儒教には三世因果の理を談ぜざるが故に当来の引業なる応からずと言う義、一往然りと雖も、而れども行は必ず感果の効能有るが故に、能く五常を行ずるときは必ず当果を感ず可き理、明らかなり。若し行因のみ有って得果無くんば、則ち因果契当の義に乖く。故に還つて不審なる者なり。

あらためて言えば、答方の見解は「五常と五戒とは、その実践内容が同じなのだから果報も同じである」、要するに「五常と五戒は全く同じものである」というに尽きる。こうした見解に対して、難方は次のように反論する——「行同」というのは「相似」の意であつて「全同」の意ではない、と。

五常五戒同の義、大師の釈文 分明なり。但し行相相似するを以ての故に「行同」と云うか。爾らば解して全同と為す可からず。若し全同に非ずんば、五戒と同じく引業と成すと言うことは極成す可からず。

この反論に対する答方からの再反論は示されていない。そして、「なぜ示されなかったのか？」の考察が、以下の本稿での主題となる。ここでは、ひとまず難方・答方それぞれの見解を整理しておこう。

#### 難方

- ・ 五常を説く儒教は外教であり、三世の因果を論じない。
- ・ 五常と五戒は、行為は似ているが、得られる利益は異なる。

答方 ・ 五常を説く儒教は外教だが、行為に対しては当然果報がある。

・ 五常と五戒は、行為が全く同じだから、得られる利益も同じ。

## 2 『宗義決択集』『五常引業』の特徴

「五常引業」とほぼ同じ主題を扱った論則として、寿門の論義書である『柚保隱遁鈔』第十六所収の「六心人中引業事」がある。それは『大日経』に説かれる「六心（種子・牙・疱・葉・數華・結実）」と、及び「五常」とが来世に人趣に生まれる因となるか、を問う論則である。表題の通り主題は一応「六心」であるが、「五常」にも言及されており、その主題はやはり（仏教と外教の関係）の問題と言つてよい。ここでは、その議論の展開を確認することで、「五常引業」の特徴を検討したい。まず「六心」について、『大日経』の記述を引き、その内容を確認する。

① 愚童凡夫の類は猶し羝羊の如し。或る時、一法の想い生ずること有り、いわゆる持斎なり。……是れ初めの種子善業の發生なり。② 復 此れを以て因と為し、六斎日に於て父母男女の親戚に施与す、是れ第二の牙種なり。③ 復 此の施を以て親識に非ざる者に授与す、是れ第三の疱種なり。④ 復 此の施を以て器量高德の者に与う、是れ第四の葉種なり。⑤ 復 此の施を以て、歡喜して伎樂の人等に授与し、及び尊宿に献ず、是れ第五の數華なり。⑥ 復 此の施を以て、親愛の心を發して之を供養す、是れ第六の成果なり。（『大正』一八卷、二頁b）

要するに、布施の対象を徐々に広げていく次第が「六心」であり、また、この記述につづいて「彼 戒を護つて天に生ず、是れ第七の受用種子なり」と説かれることから、「六心」は仏教の戒を授かる前段階とも言える。そんな「六心」及び「五常」について、難方は次のように疑問を呈す。

凡そ五戒・十善に於ては人趣の引業と為す事、所々の解釈分明に候。五常・六心に於ては唯た是れ現世の美名を飛ばし、未来の総報を感じる事、之無く候。若し六心も人趣の引業と成り候わば、五戒・十善の功德と一致なる可く候。左様に候わば、戒善は功德を失し、内外の得益は混乱す可く候。（『真全』二〇卷、四二八頁・上）

ここでは、「六心・五常も来世への引業となるとしたら、仏教と外教との区別がつかなくなってしまう」と述べられているが、

その「内外の得益」の区別とは——傍線部から分かるように——「外教は三世の因果を論じない」という、「五常引業」における難方の主張と同じ内容と言える。そして答方は、この主張に対して次のように反論している。

六心 人趣の引業と成るといわば、五戒・十善と混乱し、其の不同立つ可からずと聞こゆれども、五戒と十善との不同有るが如く意得可く候。

「五戒と十善との不同」とは、やや分かりにくい表現ではあるが、おそらく「実践内容は違うが、その得益は同じである」ということであろう。このことは、答方の次のような主張を見ると、より理解しやすいのではないだろうか。

① 凡そ人趣の引業を明かされ候に、『大日経』には六心を説き、釈迦の教えには五戒を説き、孔子の教えには五常を説き候。是れ則ち、皆人乗の教法にして、同じく人趣の引業と成る可く候。② 其上、釈迦の五戒に依らずして、偏ひとえに『大日経』の六心に依つて勤修する機根は、三悪に生ず可からず、人趣に引生せず、さていず扱何れの趣に生ず可く候や。(同前、同頁・下) ここでは、大きく二つのことが論じられている。

① 六心・五戒・五常は、それを説く主体が違っているだけで、すべて来世に人間に生まれるための教えである。

② 世の中には釈迦の教えに依らず、もっぱら『大日経』の教えに従う人もいる。もしも『大日経』の教説である「六心」が人趣への引業ではないというなら、そういう人は来世でどうなるのか？

総じて言えば、「得益に関しては六心・五戒・五常に違いはなく、その選択は各人の性質に依る」という論述である。ここで注意すべき点は、答方が「外教は三世の因果を論じない」という問題に、まったく触れていないことであろう。それはつまり、難方の質問を——少なくとも、その一部分を——無視していることになる。端的に言つて、答方には難方の質問に答える必要はなかった。なぜなら、答方にとって「六心・五常が人趣の引業であること」は自明だからである。

さて、「六心・五常は人趣の引業である」という主張の根拠(厳密に言えば「五常」の根拠のみであるが)は、「三摩耶戒序」の次の記述である。

我が大師 薄伽梵、種々の薬を施して種々の病を療す。五常・五戒は即ち愚童持斎の妙薬なり。(『定弘全』五卷、三頁。引用は傍線部のみ)

異生羝羊の凡夫は、専ら十不善等の業を造り、三毒・五欲の樂に耽り、曾て後身の三途の極苦に墜つることを知らず。是の故に眞言有智の人、樂著す可からず。愚童持齋人乗の法は、漸く因果を信じて五常・五戒等を行はずと雖も、猶是れ人中の因にして生天の樂を得ず。是の故に樂著す可からず。(同前、六頁。引用は傍線部のみ)

引用された傍線部では、「五常」と「五戒」が並べられ、明確に人に生まれる因として述べられている。そして、この引用につづく地の文では「孔子の教への五常すら人中の因業と成ると見えて候。何に況や『大日經』所説の六心をや。何事ぞ、引業と成らずと聞こう可く候や(「真全」二〇卷、四一九頁・上)」と述べ、六心も人趣の引業であると主張している。

繰り返しになるが、答方は「三摩耶戒序」の記述を根拠にして、「六心・五常は人趣の引業である」と主張している。あらためて『柚保隱遁鈔』『六心人中引業事』の内容を整理すれば、つぎのようになる。

#### 難方

- ・六心・五常は現世の果報を得るためのもの、来世の果報には関わらない。
- ・六心・五常が人中の引業としたら、五戒・十善との区別がなくなってしまう。

#### 答方

- ・「三摩耶戒序」によれば五常は人中の引業、当然、六心も人中の引業に決まっている。

このようにまとめた上で、その内容を「五常引業」と比較してみよう。目を惹くのは、五常と五戒における〈実践内容〉と〈得益〉の関係に関する見解の相違である。すなわち、「五常引業」では『秘藏宝鑰』の「行同益別」という記述に基づいて、実践内容の相似・全同、得益の格別・全同が問題にされていたのに対し、「六心人中引業」では難方はこの問題に触れず、答方は実践内容は違うが得益は同じ、と論ずる。ちなみに、「六心人中引業」では『秘藏宝鑰』の件の記述には言及していない。

とはいえ、ここではそういった見解の相違ではなく、議論の展開の相違を問題にしたい。繰り返しになるが、「六心人中引業」では「三摩耶戒序」の記述を根拠として、「六心・五常が人趣の引業であること」が結論された。一方の「五常引業」では、『秘藏宝鑰』の「行同益別」という記述は——— 論述の根拠とされるのではなく——— その解釈が議論の的となり、結果的に結論が出されなかった。すなわち、「五常引業」においては空海の著作の解釈が問題となっているのである。

あらためて、本節の主題である『宗義決択集』『五常引業』の特徴を述べれば、それは〈空海の著作の解釈が問題にされて

いることである。そして、このような特徴をもつ「五常引業」は、ほぼ同じ主題を扱いつつ、空海の著作を無批判に論述の根拠とする「六心人中引業」に比べて、議論らしい議論、緊迫した議論となっている印象を受ける。では、そのような議論から、「論義」というもののどのようなあり方が指摘できるだろうか。

ただし、その考察に入る前に、「六心人中引業」において論述の根拠とされた「三摩耶戒序」が、やはり「五常引業」でも言及されつつ、難方から「それは根拠にならない」と批判されていることを一瞥しておきたい。それによつて、ここに述べた「五常引業」の特徴——議論らしい議論となつていること——が、より明瞭になると考えるからである。

### 3 「三摩耶戒序」の記述への批判

すでに見たように、「三摩耶戒序」では「五常」と「五戒」が並べられ、それが「人中の因」である、と明確に述べられている。「六心人中引業」ではこれが論述の根拠とされたことも前述したが、「五常引業」でも答方の論拠としてこの記述は引用されている。ただし、それは答方の主張の決定打とはならなかった。と言うのも、難方は件の記述について三つの解釈を示して批判をしているのである。その解釈を順番に確認しよう。なお、ここでは「三摩耶戒序」の記述にも批判の余地があることが分かれば良いで、基本的にはその解釈の正否は問わない。

一に云わく、五常・五戒俱に人中の行なるが故に之を並挙す。然も其の中に於て人の引業と為るは、唯是れ五戒のみなり。

第一の解釈は、「人中の因」という言葉について、それは「人趣に生まれる因」という意味ではなく、「人間世界における行為」という意味だ、と述べる（この問題は、「人中因」という言葉の用例を検討することで、ある程度の正否の判断は可能かもしれない。とはいえ、前述したように、ここではその問題は問わない）。その上で、「人趣に生まれる因」となるのは「五戒」のみである、とつづいて第二の解釈。

二に云わく、『提謂経』等に五戒を明かすに、五常の名を以て説く。彼に準ずるときは、則ち今言う所の五常は是れ即ち五戒なり。而も名字不同なるを以て、並べて五常・五戒と言うなり。

これは、「ここ」で「五常」と言われているのは「五戒」のことだ」という見解である。とはいえ、「五常」「五戒」という二つ

の言葉が並べて使われている以上、この見解はやや説得力に欠けるように感じる。ともあれ、第三の解釈を見よう。

三に云わく、業に於て引満の二業之有り。五戒は正しく人中の引業と成し、五常は満業と作す。則ち引満不同なりと雖も、俱に是れ人中の業因なるが故に人中の因と積す。五常引業と成ると謂うには非ざるなり。

ここでは「引業」「満業」という概念が提出されている。辞書的に説明すれば、「引業」は六趣のうちのどこに生まれるかを決める「業」であり、「満業」はその趣における性質を決める「業」を意味する。例えば、「人趣」に生まれることは「引業」に依るのであるが、その人の中で男女、貧富、貴賤……のいずれに生まれるかは「満業」に依って決定される。

「三摩耶戒序」の記述に対するこうした解釈の正否は、まったく不明である。とはいえ、そもそも「人中因」という言葉そのものが曖昧であり、ここに提示された三つの解釈も可能であるという批判は正当であろう（ちなみに、答方はこうした批判に対して「既に五常・五戒を並挙す、何ぞ唯五戒のみ人中の因ならんや」と反論している）。要するに、「三摩耶戒序」の記述を「六心・五常は人趣の引業である」という主張の根拠にすることは批判の余地があり、事実それが批判されている点で『宗義決択集』『五常引業』における論義は——『杣保隱遁鈔』『六心人中引業事』に比べて——議論らしい議論であると云えるであろう。

#### 4 『秘蔵宝鑰』『行同益別』の解釈

『宗義決択集』『五常引業』の特徴が（空海の著作の解釈が問題にされていること）であることは、すでに述べた。あらためて言えば、そこで問題になっているのは、「外には五常と号し、内には五戒と名づく。名異にして義融じ、行同じうして益別なり」という記述、ことに「行同益別」の解釈である。この言葉を素直に解釈すれば、「行為は同じでも得るところは同じではない（宮坂宥勝『空海コレクション』六九頁）」となるだろう。しかし「五常引業」の議論においては、答方は「行為は同じ」なのであれば、当然「得るところ」も同じはずであると主張し、「益別」というのは仏教と外教を分別するための仮の説であると論じ、一方の難方は、「行同」というのは「行為は同じ」という意味ではなく、「行為は似ている」という意味だと論ずる。そして、この議論は結論に至らない。

ところで「結論に至らない」というのは、より詳しく言えば「難方の質問に、答方が答えられなかった」ということを意味す



る(論義においては、答方の見解が最終的な結論になるのであるから)。では、なぜ答方は答えられなかったのだろうか。本節では、その点を検討してみたい。そのために、あらためて『秘蔵宝鑰』の問題の記述を確認してみよう。ここでは「行同」の面について、比較的詳しく述べられている。

なお、「五戒」とは不殺生・不偷盜・不邪淫・不飲酒・不妄語を指す。それと「五常」が「行同」であることについて、『秘蔵宝鑰』では次のように対応させている。

五常と言うは仁義礼智信なり。仁をば不殺等に名づく。……義は則ち不盜等なり。……礼は曰く不邪等なり。……智は是れ不乱等なり。……信は不妄の称なり。(前引)

すなわち、仁 $\parallel$ 不殺生、義 $\parallel$ 不偷盜、礼 $\parallel$ 不邪淫、智 $\parallel$ 不飲酒、信 $\parallel$ 不妄語である、と。さて、こうした対応は——静慈圓「弘法大師の三教思想」『密教文化』一五〇号、一九八五年三月)に指摘されている通り——『顔氏家訓』に基づくと思われる。その「帰心篇」には次のように述べられる。

内外の両教は本一体なれども、漸極異を為し、深淺同じからず。内典の初門に五種の禁を設くるは、外典の仁・義・礼・智・信と、皆之と符す。仁は不殺の禁なり。義は不盜の禁なり。礼は不邪の禁なり。智は不淫の禁なり。信は不妄の禁なり。(四部叢刊本に依る)

こうした対応を、難方は「相似」と言い、答方は「全同」と言う。ところで、「五常」と「五戒」を対応させる形式は他のにも存在し、それについては南昌宏氏による詳しい解説がある(弘法大師著作研究会『秘蔵宝鑰』の研究』第一分冊、二〇一七年一月)。今、その結論のみを示せば以下の通りである。

同右	智顛『摩訶止觀』	湛然『止觀輔行伝弘決』	吉藏『仁王般若經疏』	法琳『辯正論』	皇侃『論語義疏』 〔十住心論〕所引)	『十住心論』	『秘藏寶鑰』	
不殺防木	仁慈矜養不害於他、 即不殺戒	憫傷不殺	不殺生	愍傷不殺	有博愛之德	愍傷不殺	(殺) 不殺等、恕己施物	仁(木)
不盜防金	義讓推廉抽己惠彼、 是不盜戒	清察不盜	不邪姪	妨害不姪	有源斷之德	妨害不姪	(盜) 不盜等、積而能施	義(金)
不飲酒防火	礼制規矩結髮成親、 即不邪姪戒	妨害不淫	不飲酒	持心禁酒	有明辨尊卑敬讓之德	故心禁酒	(淫) 不邪等、五礼有序	礼(火)
不姪防水	智鑑明利所為秉直中 当道理、即不飲酒戒	持心禁酒	不盜	清察不盜	有照了之德	清察不盜	(酒) 不乱等、審決能理	智(水)
不妄語防土	信契実録誠節不欺、 是不妄語戒	非法不言	不妄語	非法不言	有言不虛妄之德	非法不言	(妄) 不妄之称、言而必行	信(土)

この表によって分かる通り、「五常」と「五戒」の対応は、必ずしも一定していない。そして、ここで特に注目したいのは、それが『秘蔵宝鑰』と『十住心論』の間ですら一致していないこと——すなわち、空海の中でも対応が一定していないこと——である。このような事情を考えると、「五常」と「五戒」の対応が「全同」であるという答方の主張には問題があり、「相似」であるという難方の主張が妥当なようである。

結論を言えば、「但し行相相似するを以ての故に「行同」と云うか。爾らば解して全同と為す可からず」という難方の批判に対し、答方の反論が見られなかったのは、難方の批判が正当だったからである、と考える。そのように考えると、「五常引業」の議論について、そこでは空海の著作の解釈が問題とされ、かつ、それに関して有益な意見が提出されていた、と評価することができるとであろう。

例えば、先に引いたように『空海コレクション1』では「行同益別」を「行、為、は、同、じ、でも得るところは同じではない」と翻訳しているし、また『秘蔵宝鑰』の研究』でも「行、為、は、同、じ、でも、その効験は違っている(九四頁)」と、同様に翻訳している。しかし、これは「行、為、は、似、て、い、て、も……」とした方が、あるいは空海の意図に近いのかも知れない。「五常引業」の議論によって、そのような着想も生まれるのである。

とはいえ実情としては、こうした難方の見解によって議論が発展することはなく、逆に議論そのものが、この見解が提示されたところで中断してしまう。そのような論義のあり方について、最後にまとめておこう。

##### 5 『宗義決択集』にみる論義のあり方

『宗義決択集』に収められた論則のテキストは、実際に行われた議論を記録したものであるのではないだろうか。少なくとも——例えば、論義の台本としてであったり、問答形式の教学書としてであったり、というように——机上で理論的に組み立てられたものではなく、何ほどか実際の議論に基づくところがあると感じる。それは何より、今回とりあげた「五常引業」のように未完結の議論が収録されていることから、感じられる印象である。

そんな「論義」のあり方について、北川真寛氏は次のように解説している。

論義とは、さまざまな教説や問題点について問答を行い、密教教理の理解をさらに深めようとするものであり、学修システムとしての側面もある。そのため、敢えて問・答両者に分かれての一種のダイベート形式で問答される場合もある。（「綵画 画像について」『密教文化』二三六号、二〇一六年三月、六五頁）

言い方を換えれば、論義とは——疑問点・問題点の解決を目指すための問答ではなく——教理を学ぶための問答、すなわち（結論ありきの問答）である、と（もつとも、すべての論義でそうであったわけではないかも知れない。その点、北川氏も「ダイベート形式で問答される場合もある」と留保している）。私は、全面的にこの見解に同意している。

さて、今回とりあげた論則「五常引業」について言えば、「五常の実行は人趣への引業になる」というのが前提となる結論である。それで、『秘蔵宝鑰』の「行同益別」という記述について、とりわけ「益別」について、宝門の学匠である宥快は『秘蔵宝鑰鈔』において、つぎのように解説をしている。

① 「益別」とは、俗典の五戒ゴゲイは只現世の美名を飛ばし、後世の因果を談ぜず。内教の五戒は現世には大名聞有り、当来には人天に生ず。乃至、近くは人天に趣き、遠くは仏果に趣く功有るが故なり。……② 五常 人中の引業と成るかの事は論義なり。若し人中の引業と成る義ならば、此の解釈、如何が之を会通する可きか。答う、此れは且く俗典の所判に任せて内外一往の分別なり。理実には、行同なるが故に益同なる可し。（『続真全』一九卷、九〇頁・上）

ここでは二つの解釈が示されているが、①が通常の解釈であるのに対して、②は「五常引業」用の解釈と言える。論義においては結論が先行するために、空海の著作に対しても、独特の——ややもすれば曲解に類するような——解釈が必要となるのである。そして、すでに1節で確認したように、答方は②の解釈を提示していた。

とはいえ、論義の場合は完全な出来レースではないようである。前節で検討したように、この「五常引業」の議論において、難方は的確な批判を提出し、答方を沈黙に追い込んでいる。この例によれば、（結論ありきの問答）であったとしても、難方は相対自由に意見を述べることでできたのではないだろうか。このこと——すなわち、難方が自由に意見を述べられたこと——が、2節・3節で述べた『宗義決択集』の論義の「議論らしさ」の内実であり、それが記録されていることが、『宗義決択集』のテキストとしてのおもしろさである。

まとめると、『宗義決撰集』の論義、とくに「五常引業」の論義から読み取れる〈論義のあり方〉は、以下の通りである。

- ・ 論義は〈結論ありきの問答〉である。それは、論義が「学修システム」という役割をもつための必然である。
- ・ とはいえ、難方は自由に批判・反論をし、自身の見解を述べる事ができた。そして、そうした見解の中には、今日空海の著作を読むにあたって参照すべき、有益なものもある。
- ・ ただし、論義そのものはあくまで〈結論ありきの問答〉であり、その中で難方の見解が承認されたり、発展させられることはなかったようである。
- ・ 総じて言えば、論義の場においては、自由に議論はできても、新たな理論を創造・確立することはできなかった。

#### おわりに

以上、『宗義決撰集』『五常引業』を題材として、論義のあり方を検討してきた。では、そのような論義において「弘法大師の思想」がどのように「展開」したのだろうか。この点について私見を述べて、本稿を終えることとする。

結論を言えば、論義においては「弘法大師の思想」は「展開」しなかった。それは、論義が学修の場であり、新たな理論を創造する場〓思想を展開する場ではなかったからである。

とはいえ、繰り返し述べてきたように、その議論の中で「展開」の芽は生まれていた。残念ながら、その芽は「論義」の場では育たなかった。しかし幸いなことに、芽は「論義書」という場に保存されている。そんな「展開」の芽を掘り起こし、「研究」という新たな場で育ててみる事が——言い換えれば、論義にもとづいて「弘法大師の思想」を展開させることが——、今後『宗義決撰集』をはじめとする「論義書」を読む上での、大きな課題なのではないだろうか。

## 附記

2節において、『宗義決択集』所収の「五常引業」の内容を、寿門の論義書である印融『柚保隱遁鈔』所収の「六心人中引業事」と比較し、その結果として前者がより「議論らしい議論」であることを論じた。このことが、宝門と寿門の学風の違いに基づくのか、それとも単に両著作の性格によるものなのか、さらに検討が必要であると思う。それについて、大学院生の亀位昌芳氏から「長覚の著作『大疏指南鈔』にも「六心人中引業事」の論則が収められていること」の教示を得た。その内容を精査することによって、『宗義決択集』「五常引業」の特徴もより明確になるであろう。今後の課題とした。

## 注

・『宗義決択集』のテキストは『真言宗全書』一九巻を用いた。「五常引業」は三三一頁・下三三五頁・上であり、引用に際して一々の頁数は提示しなかった。

・以下の略称を用いた。

〔定弘全〕 Ⅱ 『定本弘法大師全集』

〔大正〕 Ⅱ 『大正新修大藏經』

〔真全〕 Ⅱ 『真言宗全書』

〔統真全〕 Ⅱ 『統真言宗全書』